
もう一度君に会えるなら、その時は

青柳朔

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

もう一度君に会えるなら、その時は

【Zコード】

Z0943D

【作者名】

青柳朔

【あらすじ】

長い長い生まれて初めて片思いの大半は、ただ遠くから見るだけだった。想いを告げないまま、未消化ままの苦い初恋は果たして終わつたのか終わっていないのか。もやもやしたままの未練は心の奥底で今も燻っている。できることなら、もう一度あなたに会いたい。

恋をしたことに後悔はなかつた。

何も言えなかつたことには未練が残つた。

胸に思いを秘め続けて約七年と少し。

この恋もようやく私の心中から消え去るつとしている。

奴に会わなくなつて、二年になる。

視界に入れればイライラするし、落ち着かないし、心のどこかで一日見れたことに浮かれてたりもするから腹立たしい。奴の記憶にはきっと私という存在はないのだから。

最初に会つたのはたぶん小学校四年生くらいの時。一歳年上の奴はかろうじて小学生だつたと思う。第一印象の記憶は私にもない。だつて大勢いる兄の友達の一人だつたんだから。

その他大勢と奴が分離されたのは、たぶん冬のある日だつたと思う。

『何してんの?』

奴は公園のベンチに座つてゐる私に話しかけてきた。

『雪、見てるの』

『何で?』

『好きだから。積もるの待つてようと思つて』

学校が終わる頃から降りだした雪はゆっくりと舞い落ちてくる。地面に触れては溶け、跡形もなく消え去る。

『自分の名前、好きなんだ?』

そう聞かれて、たぶん私は奴を不審者でも見るかのように奴を観察したんだと思う。そんな私を見て苦笑して、私の名前を呟いた。

『^{ふゆき} 芙雪、だる』

ああたぶんお兄ちゃんの友達なんだろうな その時になつて初めてそう考えた。

だから私の名前を知つてゐるんだろうと。

『氣持ちは分かるよ。俺も春とか海とか好きだし』

そう言つて隣に座る少しだけ年上の、それでも同じ年の男子よりも親しみやすい奴に私はあまり警戒しなかつた。首を傾げて見つめると、そこらへんに落ちていた棒で、淡く積もつた雪の上に文字を書いた。

『春の海、でハルミ。女みたいな名前だり?』

『……………ハル?』

兄との話題で時々出てきた名前だった。愛称を呴けば『うん、それ』と答える。

笑つた顔は確かに春の口だまりみたいで、温かかった。

その瞬間に私の脳には『ハル』という存在が焼き付けられて、その他大勢のお兄ちゃんの友達とは別になつた。

それが別の意味で分けられるようになつたのは、自然の成り行きだつたのかもしない。

「フられた」

泣き崩れる友人に慰めの言葉をかけるのも慣れたもので、ぽんぽんと優しく肩を叩く。

高校もあと一年で終わり。といつかすでに季節は冬なのでもう残り数ヶ月。一応は受験生という名目があるので本来は勉強すべきな

のだろうが、私は手堅く推薦でほぼ決まりそうだ。

クリスマスを目前に控え、友人・千夏は恋人探しに夢中だった。

「くそあ、これじゃあ今年も家族仲良くクリスマス！？ ありえない！ もう十八歳なんだから恋人と甘い一夜を過ごしたい！！」

「別にいいんじゃない、家族仲良くて」

適当なファーストフード店に入つて、泣き始める千夏を放置してオレンジジュースとポテトを運んでくる。一応二人分。

オレンジジュースを啜りながら何度も目かの愚痴に付き合つ。

「良くない！ 芙雪はそれでいいわけ！？ 十代もあと一年なんだよ！？ 彼氏イナイ歴が年齢とイコールでいいの！？」「んー……特に支障はないかな」

「おまえそれでも女子高生か！？」

性別が女で高校に通つてるんだから女子高生だよ、これでも。

気がつけば始まつていた私の初恋は、未消化のまま消えるのか消えないのか、中途半端な状態のまま胸の奥で燻つている。

冬のあの日をきっかけに私と奴は会えばそれなりに話すようになつた。その場に兄がいなくても。

小学生の間は年齢の差をさほど気にすることなく敬語も何も関係なく同等に話していたし、喧嘩もした。あの頃は友人といつても間違ひではなかつたのかもしれない。

先に奴が中学生になつても、特に変化はなかつた。

決定打は私も追いついて中学生になつた時。

学年ごとに異なる階。そこは一步足を踏み入ればまるで違う別世界で、下級生には息苦しい空間だつた。一年生と三年生。それは明らかに権力が異なり、気軽に話しかけるのは気が引けた。小学生の頃のように、廊下ですれ違うなんてこともそうあることじやなかつた。

奴から話しかけてくれれば。

そうすれば、私も変わらず話せたのかも知れない。

しかし結局、奴が卒業するまで一度も言葉を交わすことなく、ただ何度か目が合うだけで終わつた。それすら私の氣のせいだったのかもしれない。

中学に入つてからは兄との交流も薄くなり、家に来ることもなかつた。それに気の会つ友人を見つけ、新たな友人との関係は非難できることじやない。

友人もいえない私と奴との薄い繋がりは消え去り、あるのかないのか分からぬ関係に私はますます怯えた。

諦めるにはまだ近すぎて、告白するには遠すぎた。

「芙雪つてさあ、誰とも付き合つ氣ないの？　その年で恋愛に見切りつけちゃつてるわけ？」

「年頃なんだからあんなことやこんなことも興味あるでしょ？」

一通り鬱憤を晴らした千夏は矛先をこちらに向けてきた。相変わらず切り替え早いなあ、と感心する。その性格を少しでいいから分けて欲しい。

「まあ、ないわけじやないけど。本当に好きな人じやない限りどうでもいいかな。女の幸せは恋愛に限らないし」

「惚れた男がいると？　そういうわけだね芙雪君。だつたらのんびりしてないでさつさとアタックあるのみ！！　あんた顔は悪くないんだからそうそ失敗しないって！」

いや、まあ惚れてるのかと言わると怪しいものがあるのかも。でもまあ、たまにはこつちの鬱憤も晴らさせてもらおう。一度全部吐き出すのも、頭の整理にはいいのかも知れない。

「失敗がどうのは置いといて。あんたもたぶん知つてるよ。広瀬春海。ひろせ はるみうちの高校の卒業生の……文化祭とかでやたら立つてた」

「広瀬先輩！？ あんたなんて高嶺の花をつ……あの人狙つてる奴まだいつぱいいるのよ！？」

「ああ、驚かれた。まあそうか。

小、中と学校は一緒なのは当然だ。普通の公立に通つていたんだから。そして高校は故意にというわけではなく まあ偶然志望校が奴の通つてる高校だつたというだけで。いや、言い訳かもしれない。奴がいるから、そこに確定した。そう言つても間違いではなかつた。

「今も惚れてるのかつて言われたらちょっと微妙」

「何それ」

食い寄る千夏を無視してオレンジジュースを啜る。

中学で先に奴が卒業した時、何度も会うこともあった。言葉は交わさなかつたけど、近所の夏祭りとか、初詣とか、ちょっととした買物とか。まだ世界が今ほど広くなかったから、私と奴の世界が重なり合うこともあつたというだけだ。

大勢の中に奴がいても、憎いことに発見できてしまう自分に嫌でも気づかされる。

まだ好きなのだと突きつけられる。だつて姿を見ただけで嬉しい。心臓が可笑しなくらいに早く脈打つのだ。

「奴に惚れていた期間なんと約七年。今も記録更新しているかどうかは定かじやない。だつて一年近く会つてないもの」

「なつ……ななんん！？」

そうよ一応学校できやあきやあ騒いでいたあの子達とは違うのよ。あの子らが知らないことを知つていたんだから。昔は。

お調子者で目立ちたがり。いつもいろんなことに首突つ込んで、いつも皆の先頭に立つていて。真面目か不真面目かと言われば間違いくなく不真面目だと思う。なのに頭は悪くないのだ。高校も一応は進学校。なのに髪は茶色に染めて、耳にはピアスの穴が何個も開いている。そして私はたぶん真面目に分類されてしまうのだ。

「卒業してから会つてないつてこと？ まああの人東京の大学にい

つたらしいもんね。それなりに名のある

「そう。だからムカつく。こっちは真面目にこつこつと勉強してのにどうしてああいう人間は少しの努力でこっちは遙か上を行くのかなあ。ああ、殴りたい」

「惚れた男殴るか、普通」

「だからまだ惚れてるのかどうか分かんないって

一年だ。

一年も会つてない。

話をしていないのはもう何年になるんだろう。数えたくない。

高校でも廊下で会つたび、視線を感じた 気がする。目が合つこともあった。その度に、奴の頭の中で私という人間はまだ完全に消え去つていなかもしれないなんて淡い期待をする。

でも一年、会うこともない人間を覚えているだろうか？

もう何年も話したことがない、遙か昔の友人の妹を。楽しい大学生活の中で忘れずにいるだろうか？

「なんで分かんないのよ。自分のことでしょう？」

「……だって」

中学生の間、奴が先に高校生になつた一年の間はまともに会えなくて、姿を見る事ができるのも数ヶ月に一回で、その間寂しくて悲しくて惨めで、何度も隠れて泣いた。人に泣き顔を見られるのは嫌いだから一人部屋で声を殺して泣いた。

言えば良かつた。

こんな風に話せなくなるのなら、気持ちに気づいた時に伝えておけば良かつた。

そうすればきっと終わることが出来たのに。

それでも高校でもう一度あの姿を見つけた時に、嬉しかったのだ。まだ好きなんだと実感できた。

でも。

「泣いてないもの。あいつを思い出しても。未練はあるけど、好きとはもう違う気がする。……でもきっとまたあいつに会つたら

好きに、なるかもしない。
恋に落ちるのかもしない。

そうすると簡単に終わつた恋なんて片付けられなかつた。

「難しいこと考えるのねえ、あんた。恋愛は感覚でしじうが」

「超感覚派のあんたに言われても、フられたその日には諦めつくあ
んたが時々羨ましい」

「羨め羨め。あんたそのままじゃ一生恋愛できないぞ?」

「いいよ、それは別に」

「この七年の切ないような、想いが私の一生分の恋だつたとこいつ
じだらう。

そんなに長い間片思いできたところ、自体が凄いと自分でも思
うくらいだ。

「良くない! 人生これからだぞ!」

だつて、子供の恋愛だつていうかもしないけど。

会えれば嬉しかつたし、名前を呼ばれると胸が高鳴つた。自分の
名前がもつと好きになれた。新たな一面を知ることができると浮か
れて、些細なことで騒いでた。

会えなくて泣いた。隣にいる知らない女に嫉妬することもあつた。
確かに馬鹿な恋愛だつたかもしないけど、私にとつては本当に
本気の恋だつたんだ。

騒ぐ千夏と別れを告げ、マフラーを首に巻いて家に帰る。
もうそろそろ雪が降るんだろうな。吐く息が白くてもう冬なんだ
と実感する。

雪と同じように気持ちも溶ければいいのに。跡形もなく消えてく

れれば未練なんて残らないのに。

もう一度、会いたい。

会え巴きつとはつきりする。私がまだ奴に惚れてるのか、惚れていないのか。

会えたら言いたい。

好きだと、ずっと好きだったと。

「彼女、一人？」

ぽんやりと町中を歩いて最寄の駅に向かっていると、一人の男に話しかけられた。

もうあたりはすっかり暗い。クリスマス近いからイルミネーションがきらきらと輝いていた。

「一人ならさ、遊ばない？」

「……悪いけど、もう帰るところの」

一人でいるときになンパされるのは初めてだつた。友達と歩いている時になら何度も経験がある。どうせ追い払うのはいつも自分だつた。

「いいじゃん、まだそんなに遅くないしや」

遅くなからうが遅からうが見知らぬ男にのこのこついて行くほど軽くはない。

「どいてよ、邪魔なんだけど」

自分より背の高い男一人に立ち塞がられないと、異常なほど圧迫感がある。

思わず一步後退ると、面白げに一步男達は近寄る。しまった、劣勢になつたと気づいた時にはもう遅い。

「ね、どこ行く？」

「どこも行かない。もう家に帰るんだと何度も言えば分かるんだ」の馬鹿男どもは。

腕を捕まえて私は声を上げる。

「放してよ！」

そんな状況すら喜んでいるんじゃないかと思うほど笑つて私を見てくる男に吐き気がした。なんて馬鹿で、なんて汚いんだろう。どうせこいつら女なんて非力で泣き叫んで周りに助けを求めるしかできないんだと思ってるんだ。自分達の腕力で言うことをきかせて支配欲を満たすような愚かで脳みその足りない男なんだ。

そうやって頭の中で思うことでしか抵抗できない。

いくら私が叫んでも助けてくれるような人なんていないんだろうな。世の中所詮そんなもの。腕力がこいつらより劣るのは明白なんだから。

ああやだな。女なんかに生まれてこなければ良かつた。

そうすれば、たぶんあんな初恋もなくて、私という個人で奴と友情を築いて、今頃ももしかしたら連絡を取り合っていたのかもしれない。

情けなくて涙が出てきそう。でも泣きたくない。こんな汚い男の前で泣きたくない。

「^{ふゆき} 芙雪」

低い、聞いたことのない声。

でもどこか懐かしかつた。温かい春の日だまりのよつた、そんな優しい響き。

ゆつくりと、顔だけ振り返る。

見間違えるはずがない。だつて私はどんなに大勢の中に奴がいて

も見つけられた。こうして私を見てくる奴を、間違えるなんてありえない。

でもどうして、こんな、正義の味方とかヒーローとかみたいに登場するの？ ずるくない？

「……………ハル」

久しぶりに、その名前を呟いた。中学高校とどう呼べば良いのか分からなかつた。

「悪いけどこの子先約済み」

ぐいっ、とびっくりするほどの力で引き寄せられた。とん、と胸に押し付けられて顔が紅潮する。
ずっと遠目に見ていただけだから、そんなに身長差があるとは思わなかつた。

ナンパ男は彼氏（では決してないけど）そう見えているのだと思う）の登場にすこすこと立ち去る。ああいう男は大抵相手が来ると簡単に引き下がるから不思議だ。

「行くぞ」

どこに、と聞く前に手を引かれて歩き出す。

行く先に明るい駅が見えたので納得した。

どうしてここにいるの？ どうしてあんなタイミングで会うの？
どうして今まで話しかけてこなかつたくせに助けてくれたの？
私のこと覚えてたの？

いろんな質問が頭の中で浮かんだけれど、それも聞けなかつた。
歩くペースが速いので自然と私は小走りだ。
だからだろうか、心臓が今にも破裂しそうなほどに脈打つていて。
言い訳だ。

会えて嬉しい。嬉しくて嬉しくて浮かれてる。ああ、私はまだハルが好きだったんだ。またハルを好きになつたんだ。

「ハル」

先を歩くハルの顔が見えない。

繋いでいる手に少し力が込められたから、聞こえているのは確か

みたいだ。

「ハル。ねえ、ちょっとー、速いつてばー、手もつ
少し、痛い。

聞きたいことも言いたいことも山ほどある。

ぎゅ、と手を握る力がまた強くなる。骨が軋んだ氣がある。折れないといいけどなんて冗談が浮かんだ。

「……痛い」

ぱつりと呟くと、突然ハルも歩みが止まる。そのまま勢いが止まらずに私はハルにぶつかった。止まるなら止まると言つてくれ。

「おまえな、夜にふらふら一人で歩くなよ」

怒ったような声に、身体を縮めた。

「一人つて……さつさまで友達が一緒だったのよ。でもあいつ地下鉄だから」

千夏とは店で別れた。どうせ駅なんて田と鼻の先だし。

「誘つてくれつて言つてるようなもんだって。おまえ昔つかうやついつどこ鈍い……もういい。たく、少しは気をつけろよ」

「……ものす」ぐ都合のいいタイミングだつたけど。いつからいつ

ちに戻つてたの？ 大学東京なんでしょう？」

「たまたまだよ、全部。法事でこっちに戻つてて」

ああ、どうして今までこんな風に話せなかつたんだらつ。馬鹿みたいだ。

実に話したのは何年ぶりか。最低でも中学高校の六年は話していない。実質こいつに惚れてからはほとんど話していないのか。

「……芙雪？」

なんて温かい響きなんだらつ。空から降る冷たい氷の結晶しか想像させない名前のはずなのに、ハルが声にすると甘くて心地良い。もつと呼んで欲しい。

なんて不器用な私。

長い長い初恋を終わらせむことが出来ないまま、まだこの日の前の男に恋してる。

でももう終わりにしたい。

苦しいのも切ないのも、嬉しいと思つことすら、全部。

「…………好き」

きゅ、とハルの手を握る。

温かいぬくもり。優しい春の温度。

もう未練なんて残したくない。もうこれで一度と会えないかもしない。なら今言うしかなかつた。無意識にそう呟いていた。なぜか無性に泣けてきて、恥ずかしくなる。

泣き顔なんて見られたくないのに、涙が溢れた。

「…………なんで今更言つかな

ハルが苦笑しながら呟く。

今更なんだろうか？ 言つ機会が今までずっと無かつたのに、今更？

「ずっとそういうじゃないかななんて思つてたけど、聞く機会がなかつた。俺卒業してからもう一年も経つしいいがげん他の男に移つてたんだろうと思ったのに」

移れるなら移りたかった。けど結局恋が出来ないまま、今に至る。

「私、意外と一途だから」

「意外ととか自分で言うか？ でもまあ、人のこと言えないか俺も「そつとハルが手で涙を拭ってくれる。その仕草があんまりにも自然だつたから、やつぱり女慣れしてやがると内心ムカついた。

「どこが。あんた高校だけでも彼女何人いたの？ 知らないとでも思つ？ あんた目立つてるんだから嫌でも情報が耳に入るのよ？」

最低でも七人は固い。それで一途とかどの口がほぞく。

私が睨みつけるとハルは苦笑する。

「本命はずつと別にいたつて言つたら信じる？」「信じない」

好きでもない人となんて付き合えない。それが私の持論だ。

「ここまで鈍いとさすがに腹立つんだけど。誰のこと言つてるのか分かんないわけ？」

なんでおまえが腹立つんだよ。怒りたいのはこっちだよ。告白の答えはどうなつた！？

むす、と涙目で睨みつけるとハルはまた優しく涙を拭ってくれる。その優しい手がなおさら泣かせてるなんて気づかないんだろう、この男は。

「俺的にこの再会はかなり運命的だと思つんだけどなあ
くすくすと笑いながら、ハルが頬に触れてくる。自然と顔を持ち上げられて、背の高いハルを見上げる形になった。
ああ、意外と睫が長いんだ。知つてたけどムカつくくらいに整つた顔をしてる。

次第に近づいてくるハルの顔を見つめながらそんなこと考えていた。

目の色が薄い。黒というより茶色っぽかった。その瞳に映つてるのは自分を見てなんて情けない顔してるんだろうと思つ。
その目が閉じられて、気がつけば冷えた唇に柔らかい何かが触れていた。

あれ、何これ。

「…………！」

咄嗟に逃げようと身体が動く。

しかしつの間にか背中にハルの腕が回されていて、動けない。頬に添えられた手が顔を逸らすことすら許さなかつた。

何これ何これ何これ何これ！？

ちょっと待て。町中だぞ。ていうか何しやがるこの女たらし。自

分に惚れてる女には何してもいいっていうのか。悪いがこちどりアーストキスなんだよ!! 乙女が夢に夢見るあの伝説の…!

やつと唇からぬくもりが去り、ハルが意地悪そうに微笑む。

「田ぐらい閉じろよ。色気ない

「~~~~~つ……」

声にならない声でハルを罵る。

ひどく長く感じる一瞬だった。

「……嫌いだ、あんたなんか」

「数分前に好きだと言ったその口が言つか

言わなきや良かった。

今のは何? どういう意味? 告白の返事は?
好きだという前よりも頭の中には悩みが溢れる。

「いいよ別に嫌いでも。俺気は長い方だし、一途だから

「だからあんたがそれを言つ…?」

「好きでなくとも付き合つ」とはできるよ、特に俺みたいな男はね。
でも本気で好きな奴がいたことも事実だし

「だとしたら最低!」

好きでもないのにキスできるわけ? と睨むとハルは笑う。何が
そんなに可笑しいの。

「俺、自分からは好きな奴にしかしないけど? 今さつき生まれて
初めて」「

自分からじゃなければ出来るんじゃない、と文句を言つて、思考
が止まる。

壊れたラジオみたいにハルのセリフが頭の中でリピートしていた。

「……………はい?」

空耳だろ? かと聞き返す。空耳だとしたらなんて都合のいい。

ハルは呆れたようにため息を吐き出し、もう一度私の頬に触れて
きた。反射的に逃げようとする私の腕を掴み、笑う。

「もう一度しなきや分からない?」

「や、ちょっと……」

抗議の言葉は飲み込まれ、もう一度温かい唇が触れ合つ。柔らかく温かいそのぬくもりに抵抗する意思すら奪われる。

あ、なんて遠回りをしてきたんだろう、私たち。

もう一度会えたら、その時は。

好きだと言つてこの恋を終わらせようと思つたのに。
もう未練なんて残さず、淡い初恋だったと終わらせようと思つた
の。

私の初恋は、まだ終わらない。

(後書き)

半分は苦い初恋の経験から（苦笑）残り半分は妄想です。
初恋つてけつこひ弓きするものだなあ、といつ最近改めて想つたの
でこんな形で世に出してみました。

「」感想、「」指摘などありましたら一言からでもお願ひします！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0943d/>

もう一度君に会えるなら、その時は

2010年10月8日13時45分発行